

実践的な指導力のある教員養成の在り方に関する基礎的研究

A basic research on the training of teachers with the practical educational leadership

中村 正宏（教育学部附属教育実践総合センター・教授）

Masahiro NAKAMURA

(Center for Clinical and Educational Practice・Professor)

1 研究のねらい

本研究は、「実践的な指導力のある教員養成の在り方」を明らかにしていくための基礎的な調査研究として取り組んだものである。ねらいは、①新採用教員または若い教員を日常的に直接指導助言している小・中学校の管理職や指導教員から、そのよさや課題、大学教育への要望などについての情報を集め、教員養成の成果と課題を明らかにすること、②若い教員の課題である人間関係能力やコミュニケーション能力などを育成する1つの試みとして、大学生を子どもたちや保護者との宿泊を通じた交流体験に参加させ、そこでの学びの成果と課題を明らかにすることである。

2 研究の方法と内容

<調査1> 「小・中学校訪問による管理職等への面接調査」

平成17年度の本学部卒業生で、平成18年4月に埼玉県及びさいたま市に採用となった教員の小・中学校を直接訪問し、校長・教頭などの管理職や教務主任・初任者指導教員から、新採用教員や若い教員のよさや課題、教員養成への要望などの聞き取り調査をした。面接調査の対象は、県内12市町村23小・中学校、実施時期は、平成18年9月～1月、調査内容は、「①教科・領域指導 ②学級経営・生徒指導・部活動 ③人間関係（保護者・教職員）④服務 ⑤大学教育への要望 ⑥その他」である。主な調査内容は以下のとおりである。

①教科・領域指導では、初任者や若い教員は、教育実習の経験や配置校等でのきめ細かな初任者研修により、教科の指導力は高く評価されている。反面、道徳や学級活動などの授業展開に課題があることが指摘されている。特に、本学卒業生は、遅れがちな子どもへの理解に課題があること、学生時代に学んだことを指導に生かそうとする傾向があることなどが指摘されている。

②学級経営・生徒指導・部活動では、初任者や若い教員は、子ども理解を大切にして、よい学級づくりをしようと悩みながら努力している。反面、児童生徒一人一人との人間関係、特に、指導に手間がかかる児童生徒との関係づくりに苦労しているとの指摘が多い。

③人間関係（保護者・教職員）では、様々な手段により保護者との連携を図ったりPTA活動に参加したりして教育活動を行っている初任者や若い教員も多い。しかし、社会情勢や家族・家庭の変化などから様々な考えの保護者がおり、慣れない保護者への対応に悩むものも多い。また、校内での先輩や同僚との関係では、持ち前の明るさや素直さでよい関係をつくっているものが多い反面、本人の資質や生活経験からくるものと思われるあいさつや返事、笑顔などの基本的なマナーを課題として挙げる学校も多い。人間関係づくりやコミュニケーションの力に課題があることも指摘されている。

<調査2> 「子ども・保護者等との交流体験を通じた大学生ボランティアの意識調査」

埼玉県立青少年教育施設における「長期自然体験活動（小・中学生だけで4泊5日の生活交流体験）」「家族交流体験活動（就学前の子とその親との1泊2日の交流体験）」に、本学

学生を含む教員志望や教育関係を専攻している大学生を参加させ、面接及び質問紙調査を実施した。調査内容は、①参加した子どもや保護者について（よかったこと・困ったこと等）、②自分自身について（成果と課題）である。主な調査内容は以下のとおりである。

①参加者について（よかったこと・困ったこと等）では、長期自然体験活動において、大学生は、班担当として初めて出会った様々な子どもたちをまとめ、子どもたちといっしょに5日間多様な活動をしたり、食事をつくったり、いっしょにバンガローに泊まったりするなどの体験は初めてである。最初は、わがままな子、元気いっぱい走り回る子、寂しく一人でいる子などがたくさんおり、悩みながらも本気で子どもたちと関わろうと努めた。子どもたちが集団としてまとまり、成長する姿をみて、驚きと感動の5日間だった。この活動を通して、子どもに関わる楽しさや充実感とともに、叱り方や注意の仕方、一人一人にバランスよく接することなどの難しさも学んだ。教育実習などでは体験できない貴重な学びがあった。

家族交流体験活動においては、参加した大学生はみな乳幼児教育専修であり、保育園・幼稚園で子どもたちと活動することは経験していたが、見知らぬ家族の中に入っただけの活動は初めてである。はじめは緊張ととまどいであったが、自己紹介などを通してそれぞれの家族とうちとけていき、親子のふれあいや愛情、温かさなどに接して、2日目には喜びと感動に変わっていた。

②自分自身について（成果と課題）では、長期自然体験活動において、大学生たちは、5日間を通した子どもたちとの活動により、子どもとの具体的な接し方や子どもとともに生活・行動する方法を具体的に学んでいた。また、子どもたちの就寝後全員で毎日ミーティングを行い、明日の細かい打合せとともに、お互いが抱えている子どもをリードする上での悩みや問題点を出し合って考え、互いに励まし合っていた。このことが活動の成功や子どもたちの成長、大学生の自己実現につながっていた。一方、仲間の行動をみることで、叱るときには叱る、時には厳しく指導することが必要であることなどの自分自身の課題にも気付いた。教師を目指す大学生にとってはかけがえのない経験をしていた。

家族交流体験活動では、1泊2日という短期間でだったが、大学生は、親子のよさや愛情の深さ、家族のすばらしさなどを感じたことを挙げていた。また、家族の中に入っただけの経験から、子どもや保護者に関わる知識や技量の不足を自分自身の課題ととらえていた。さらに、様々な状況の家族・家庭があり、そのような家族と積極的に関わる必要性も課題として挙げていた。

3 研究の成果と課題

「調査1」では、本学出身者を含めた若い教員について、教科の授業の力はあるが積極的に取り組むが、学級経営や部活動など子どもたちとの人間関係づくりに課題があること、保護者・地域との関わりだけでなく、教職員との関わりにも課題があることなどが指摘された。教員養成への要望については、教員としての人間性や社会性などに関わる資質の向上に関するものが目立った。

「調査2」では、学校体験では経験できない子どもや保護者との宿泊を通じた新たな出会いの中で、とまどい緊張し困難な場面に遭遇しながら、人と人とのつながりや感動を体験した。大学生たちは、活動を通して、子どもへの接し方や指導・支援の在り方、集団としての育て方などを学び、教員として求められる子ども理解力、対人関係能力、使命感や責任感などの基礎を獲得しつつあった。

今後の課題は、この調査で各学校から指摘された内容を教育実践総合センターの取組に具体的に位置づけていくこと、学生の大学外での多様な体験活動を継続的・安定的に進めるための仕組みづくりを進めること、学部の改組のねらいである「力量ある質の高い教員の養成」と「実践的な指導力」との関わりを明確にすることである。